

きる豊かさ、幸いについても例外ではありません。

愛を与える人へのみ、愛は返って来るのです。親切を与える人へのみ、親切は返って来ます。しかし、返って来るとは必ずしも相手から具体的な愛や親切が来る、ということのみではありません。愛に対して憎しみや裏切りが返って来たり、親切に対して誤解やしつとが返って来たりします。又何も返って来ない場合だってあります。

しかし、それにもかかわらず与えることは得ることなのです、と申しますのは、与え得たという自分自身についての喜びは自分自身を平安にし、豊かにするのです。

これは、物惜しみする人間の知らぬ世界です。

(51 · 5 · 16)

25

「わたしは どんな境遇にあっても
足ることを学んだ。わたしは貧に処す

る道を知っており、富におる道も知
っている。わたしは、飽くことにも
飢えることにも、ありとあらゆる境
遇に処する秘けつを心得ている。わ
たしを強くして下さるかたによつて
何事でもすることができらる

(ピリピ書 4章 11節 - 13節)

俳人芭蕉の弟子に千里という者がいました。あるとき千里は師の芭蕉について東海道を
西へ下って行きました。日頃、富士さんの秀れいに憧れていた千里は、いよいよ箱根路へ
さしかかると心が躍りあの壮大秀れいな富士山の姿に接して一句をものしようとして心をかま
えておりました。

ところが、箱根路へかかると、あいにく霧が深くて富士山どころか周囲の谷や森も見通
すことすらできません。千里は落たんしました。不平・不満・愚痴が千里の口をついて出
て来ました。

これを聞いた師の芭蕉は、静かに千里をたしなめて言うに、〃風雅の道に志しているものは、何処に置かれようと、つねに置かれた境に即してその中に妙趣（おもむき）を見出してゆくものだ。富士山が見えぬというて不満・愚痴を口にするようでは、まだ風雅の道にはいり得ていない。これはみな、自分というものを立てているから出て来るのだ。自分を基にしてゆくから、置かれた境の味が解らなくなるのだ。自分の願いたいというものを基にして現実**に**ぶつかってゆくと現実がもっている、いろいろの美しさが見えなくなる。

自分というものを基にするから霧が邪魔になる。霧の立ちこめたる風情がわからなくなる。

先ず自分を捨てる修業をせねばならない。自分を捨てれば捨てるほど、一切のものがそのまま、そのものの本当の趣・味・姿が見えてくるものなのです。〃と教えて、次の句を作りました。

「霧しぐれ 富士を見ぬ日ぞ 面白き」

風流の道とは風の流れに自分をゆだねて生きる生であります。その風とは自然の理・ま

こと・存在の根本でありキリストであります。芭蕉はそれを俳階道で見出し、パウロはイエスに於いてそれを見出したのであります。

(51・5・23)

26

「人の歩みは神によって定められる。
人はどうして自らその道を 明らかに
することができようか」

(箴言20章24節)

わたしたちは、その一生に於いて、いろいろな人やものに出会うと共に、いろいろな出来ごとにあうものです。そしてその都度、喜こんだり、悲しんだり、誇らしく思ったり悔んだりいたします。

こうした出来ごとやことがらのうち、その原因がはっきり解っており解決が比較的かん

たんにできるものがあり、又原因がはっきりわかっている、どうしても解決できない、といったものがあります。更に、原因が全くわからぬもの、つまり、突然降ってわいたようなことだってあります。

その原因が解っており、解決が比較的かんたんであるようなことがらとは、自分の態度の如何で状況を変えることができる。といったたぐいのことがらであります。

ところが、人生には自分の知恵・他人の助けをもってもどうにもならないこと、というものがあります。即ち原因がわかっていても、どうすることもできないもの、又原因が全くわかぬままに迫り来たものなどです。

右に述べた第一の場合、わたしたちは、愛と知恵とをもち、我をすててすみやかに対処すべきで、いらぬ虚勢やめんつ、利己心などにふりまわさずしては、決して問題を困難にするのみで解決へは向いませぬ。

又、第二の場合でも、時として時間が解決してくれることがあります。その当時は全くどうにもならぬと思われたことでも後になって「あれでよかったのだ」と思うことだって

あります。

とにかく、人は一生のうちいろいろなところに出会うものです。これがまぎれもなく、自分が生きている〃ということの証しにほかなりません。そこで大切なことは〃どうすればよりよく生きられるか〃ということです。それには、ことがらに正しく対処する知慧を自からもつことです。聖書はこの知慧をわたしたちに与えてくれます。これは生活の知慧、人生の知慧、死をも克服せしめる知慧であります。この知慧を多くの人々が持っていない、ただくことを願っているのが私たちの教会です。

(51・5・30)

27

「若い人の栄はその力 老人の美しさは そのしらがである」

(箴言20章29節)

若い時には、何ごとをするにも前後のことをわきまえずに、情熱にまかせておしすすんで行くことがあるものです。その結果「度」がすぎて失敗を招くことになります。

ものごとには、すべて、そのものを生かすにふさわしい適当な度合というものがあります。その度合を心得えずしてことをなすと、それがもつ本来の味を全く失はしめても、ともなくなくなってしまいます。

料理をするにも、その材料の味を最も生かし美味しく食するにふさわしい料理の方法があるものです。ただやたらに強い火で煮ればよいというものではないでしょうし、しょうゆやさとうを加えれば必ず美味しい味がつくとは限ったものでもないでしょう。

とにかく、何ごとに於ても、そのもののもっている味を最高に生かす度合というものがあるということ。そして、それがわかるまでには長い時間がかかるものです。

わたしは、老人のしらがの美しさというものを、その度合を心得ているしとして見たいのです。

人が自分自身にとって気づかねばならぬことの一つは、自分を生かすに適当な度合が何

処にあり、何であるかということ。それには長い時間がかかります。

これを一口に言えば「己れの分を知る」ということでしよう。これは決して停たいた的・消極的・な人生態度ではありません。ゆるぎない確実な発展のために必要な知恵なのであります。

老人のしらがの美しさは、人生のものごとに関わる度合を知る知慧と己れを分をわきまえるけんきよさと、さらに子弟に対し、その教訓を残す偉大さにあると思います。

わたしたちも相互に、そのような、美しいしらがを持つ老人になりたいものだと思います。

(51・6・6)

28

「信仰の導き手であり、その完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうで

はないか」

(へブル人への手紙)
12章 2節

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。イエスのわたしたちに対する慰めと意義は「共にいる」ということであります。

ひとは自分の利害によって共にいたり離れたり逃げ去ったりいたします。ペテロはイエスが最も困難に遇っているとき、共にいなければと思いつつも、現実はいエスを捨てて逃げさっていました。その自分の様に泣きつつ逃げたのです。

相互に愛し愛された仲の男女が、自分勝手な思いの故に愛をうらぎって他のひとに行くということは世間では日常的な出来ごとです。「共にいる」ということのむつかしさを寛げます。

また共にいるということは、只一語にいますということではありません。喜びを聞き、苦しみを聞き、その心と心・思いと思いの連滞感・一体感を共感することであり、と考えて来ると「共にいる」ということは何とむつかしく、しかも困難なことでありましょ

うか。

しかし、イエスは、〃いつまでも共にいる〃と申されるのです。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」(ヘブル書 13・8)

私たちの思いは、その時の状況次第で変わります。気分が変わります。しかし、イエスはきのうもきょうも、いつまでも変ることがないのです。

愛とはイエスのその様であり、まこととはイエスのその様であります。

それ故に、私たちは望みをそのイエス・キリストの愛とまこととにかけるのです。決して自己の愛やまことや、また決意に依る信仰ではありません。

「神は愛であり」(ヨハネ第一 4・10) その愛に生かされるものには即ち「愛には恐れがない」(ヨハネ第一 4・18) のです。

「わたしがお願いするのは、彼らを
世から取り去ることではなく、彼らを
悪しき者から守って下さることであり
ます」

(ヨハネ福音書 17章 15節)

これは、弟子についてのイエスの祈りであります。

イエスは、自分の亡きあと弟子たちが、さまざまの不幸にめげず、しっかりと信仰の信
義に生きることが祈られました。

信仰の信義に生きるとは、イエスがご自身の生きざまによって語り示された「神を信じ
人を愛する生きかた」であります。

人のまことの生きかたは、人が人を愛して生きるところにあります。これは実に月並な
言い方ですが、これ以上に人のまことなる生き方はありません。この人のまことなる生き
方が、人にとって当りまえであり、人生にとって究極的なものなのだということを教えて

く・れ・、そ・う・信・じ・さ・せ・て・く・れ・る・の・が・信・仰・で・あ・り・ま・す・。

イエスは、弟子たちが、この信仰の信義を見失ってしまうことを最も心配されました。この世の中は、ときとして、人を欺く者が幸福に生きられ、自分のことのみ考える者が立身出世し、人を利用する者が賢者のように思われます。他人のことを配慮した故に馬鹿を見た、ということの話はいくらもあります。

しかし、だからと言って人が人のまことをすててよいものでしょうか。にもかかわらずすててしまわなければ自分が生きられない、というきびしさがこの世でもあるのです。

信仰の信義に生きるとは、このすさまじい世にあって、尚人のまことをみつめ、愛に生きることの喜びと尊さとをよく知って生きることだと申せます。

この信義に生きることを否定する勢力すべてを、イエスは悪しきものと申されたのです。そして、その悪しきものから守られて生きる者の、いわば人間であることの証言の集団が教会なのであります。

「平和をつくり出す人はさいわいで

ある」

(マタイ福音書5章9節)

ここで用いられている「平和」という言葉がもっている意味内容は「泰平」「和睦」「平安」「安全」「無事」「幸福」そして「秩序ある状態」等を含んでいます。

従って、イエスが「平和をつくり出す人」というとき、それは決して国際舞台で国と国とを戦争に追い込まぬように働く人のことではなく、又政治的・社会的に大きな働きをする、といったような人について言っているではありません。

「平和をつくり出す人」とは人が「幸福」を感じ、人と人とが楽しく「和睦」のうちに交わり、社会が「秩序ある状態」で歩みつづけるように、これを助け、配慮する人のことでもあります。

「神の支配し給うところには、義と平安と喜びがある」それ故に「わたしたちは、平和・平安に役立つことを追い求めようではないか」(ロマ書14・17/19)

とパウロは教会に集う人々にすすめておりますが、信仰や宗教の真髄は、個人の内なる平安、人と人との関わりの平和にあります。そして、それを人にあたえ、人々の中にもたらす人が真の信仰人、宗教人の姿であります。

しかし、世の中には宗教や信仰又は修養団体と称するものに属する信者が、自分の信ずる教義の故に家事をすて、家族を省りみず、近隣と交わりを断って正にひとりよがりな熱心におぼれて、自分の周囲の人々に不決をまきちらしている人々がいます。それを、熱心な信徒として指導者や同信の友がほめそやす。これは全く宗教や信仰の風上におけない狂った集団です。

それが正しい宗教か否か、信仰か否かということは、「平和をつくり出す」それであるか否かによって判断できます。

「すべての重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとに來なさい。あなたがたを休ませてあげよう」

(マタイ福音書 11章 28節)

この人生を誰だれも重荷を負わずして、生きてゆくことはできない。生者必滅のことわりの中で、さまざまな苦しみ悩みをもって人間は生きてゆく。

イエスが生きた当時の人々も例外ではなかった。特に一般民衆は、ローマの支配とローマのカイライであるユダヤの支配階級の祭司・王侯・貴族・地主たちの、あくなき利欲を目的とした政治の故に、重税と宗教税に苦しみ、更に日でり・いなごの害などの災厄にあつて、借金のため、土地を失い、ルンペンの如き生活を強いられた。彼らは、ただその救いとなぐさめとを神に求めた。しかし、この敬虔なる民の祈りと共に捧げる動物や礼拝器具を売りつけ、ぼう利をかせいでいたのがまた祭司や貴族であった。その他取賄などは日常なことであり、それによって財をなす者も多くいたということである。

正に、これこそ「異邦人の支配者たちは、その民を奴隷にし、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている」とイエスが指摘した通りである。

今日のロッキード・大正年間のシーメンス事件などが、し・よ・う・ち・よ・うする如く、いつの世にあっても、一般民衆は権力ある者の悪行の人災により、苦しみあえぎつつ生きていると言える。

このようにして人間としての宿命的苦しみと、一握の権力者による人災との二重の重荷を、イエスは「重荷を負うて苦勞している者」と言ったのである。そしてその重荷の正体をよく見極め、それにめげずに立上って生きて行くようになる能力ちからを与えることを「休ませてあげよう」と言うのである。

「休む」とは、決して何もしなくてすむようにするというこの意味ではない。

(51・7・4)

注 「重荷」とは厳密には祭司たちが律法主義的生活を人々に強制し、それが神の前に正しく生きることだと教えたことを指しています。

「すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって人の中から出てくるものが、人をけがすのである」

(マルコ福音書7章15節)

この日には、かの食物。かの日には、この食物を食すべからず。宗教はときとしてこのようなタブーを信者に要求し、信者もそのタブーを守ることと安心したり、救われたような気になっていることがあります。

イエスの時代のユダヤ教もその例外ではなかった。彼らは日との関係で食物を考えただけでなく、食物そのものに汚れた食物と清い食物とに分け、汚れた食物を食するとき、食した人も汚れると考えたのであります。(今でも、そんなことを言って、宗団で作った飲食物を信者に売りつけて、宗団がガッポリと金もうけしている宗教があります。)

それに対してイエスは申されました。「外から人の中にはいつて来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか。それは人の心の中にはいるのでなく、腹の中にはいりそして、外に出て行くだけである。イエスはこのように、どんな食物でも、きよいものとされた」

(マルコ7・19)

では人を汚すものは何か、又どこから来るのか、イエスは申されます。「人から出て来るもの、それが人を汚すのである。すなわち、人の心の中から悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、姦淫、貧欲、邪悪、歎き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴、まじない、党派心、偶像礼拝」

(マルコ7・20 ガラチヤ5・20)

本当にそうです。山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。と王陽明が言うとき、この心中の賊こそ、イエスが言う人をけがすものなのであります。

ここに人間の救われ難い罪の一つを見ます。この罪人性を負う私たちを救わんとするの
が、ほかならぬイエスであります。

人間の問題の一切の根はここにある。

「あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない」

(出エジプト記 20 章 4 節)

これは、いわゆる「偶像礼拝」についての禁止のいましめであります。

キリスト教の特色であるこの偶像礼拝をしない。という教えはユダヤ教よりうけついでものであります。

偶像とは読んで字の如く「愚かな像」ということで、旧約聖書の言葉に於いてもエリール即ち「価値なきもの」「空しいもの」を意味している言葉で表されています。

その空しさを語った聖書のか所にイザヤ書 44 章 9 / 17 又はエレミヤ記 10 章 1 / 10 などがあり一読して下さい。

ではなぜ偶像が愚かな語なのでしょう。ここでよく注意しておかねばならぬことは、像自体は決して愚かではない、ということです。その像を「偶像」にするのは人間なので

す。即ち、その像が何か不思議な力を秘めているかのように思い込んで、像自体に人間の側が支配されるようになるとき、像は人間にとって「偶像」になるのです。

ところが世の「非偶像礼拝主義者」たちは、像自体が愚かであるかのように思い込んでそのものを馬鹿にする場合があります。考えてみると、そのような人も一種の偶像礼拝者なのかも知れません。とにかく以上のことははっきりキリスト者は認識しておく必要があります。

さて、像とは人の思いが人の手により型となったものです。したがって像の像となる以前には人の思いがあるのです。それは、何かを願ひ、何かをみつめ、何かを知っている思いであります。それらの思いが形となって表されたものが「像」であります。

とすると、像の中には、神をみた人の思いが造形されてあるかも知れない像だつてあるかも知れません。このように考えて来ると「像」である故にと言つて馬鹿にすることは出来ません。以下次号でこのことを考えてみたいと思います。

「あなたは 自分のために 刻んだ
像を造ってはならない」

(出エジプト記20章4節)

「像」そのものが「愚」なのではありません。「像」をして「愚」たらしむるは、像が何か神秘的な能力をもっているかのように思い込んで像を礼拝の対象とする、人間の愚かさによるのです。

それにしても「像」とは一体なになのかと申しますと、それは、人の思い、人の考え人の感じたこと等が形を成して表されたものであって、ただの「もの」なのではありません。人の心は深く、人の思いは大きく、その精神は、ときとして人間の心、思いを越えて神の思い、神の心に支配されることだであるのです。

本当の「まこと」を見、最も「善」なるものにふれ、型なる「美」を感じることであってあるのです。その時、それを造形し、ものを通して表そうとする。仏像と呼ばれるものは

言わば、これらの一つであると申せます。

仏像とは、仏の像であり、仏とは、時を越え、場所を越えていつもこの世界に、人の思いと別存在する、世の中のまことそのものことでありそれが形となって、人の手により、ものによって表されたのが、ほかならぬ「仏像」だと申せます。

それ故に、その仏像に接する人が、像に於て語り示されようとする、その心、その思いを感じとるならば、像の存在理由は感じとる人に充分なのであって、像はそれ以上の何ものでもないのです。ところが、もし人が、像そのものと、像に於て語り示されているそれとを同一視すると、忍ち像は、ただのものとしての像から、まことそのもの、神そのもの、仏そのものとなってしまふのです。ここに偶像が生れるゆえんであります。

わたしたちは、それゆえにどのような像にも、絶対に礼拝する愚かを行ってはなりませんし、この態度は、人間を正しく生かす基本になるのです。

「人が誘惑に陥るのは、それぞれ
欲に引かれ、さそわれるからである。

欲がはらんで罪を生み罪が熟して死
を生み出す。

(ヤコブの手紙 1章14節)

ことわざに「欲には目見えず」というのがあります。それは、欲に目がくらむと物事の是非、善悪の判断がつかなくなることを言ったものであります。

欲には肉欲、物欲などがあり、たえず身体や心を悩ませ、かき乱し、煩らわせ、惑わし、汚す作用をし、仏教では人間煩惱のよって生ずる根本とし、聖書は人間の罪のよって生起して来るところと語っています。

しかし、誤解してはならぬことは、欲そのものが即罪ということではないということ
です。

かのフロイドなどは欲そのものを、人間の生の根源的な力となし、文化創造の源動力とさえ考えましたし、ニーチェという哲人は、より強大で充ちた存在になろうと欲する、人間の欲を「権力への意志」とし、この意志こそ新しい人間の在り方を生み出すものであるとしました。

とにかく欲が欲である故に即悪・罪とすることは誤りであります。

問題は、欲に必要以上にふりまわされる人間の在り方にあります。

それにしても、人間はなんと欲にふりまわされやすい存在であることでしょうか。それ故に私たちは多くの失敗を犯します。

欲は必要であり、欲は時として人間を犯すものはの剣です。この矛盾した人間存在、そこに人間の悩みがあり、罪があります。

そこで聖書は、この欲に関わる人間の在り方、欲を見る眼について正しい人としての生き方を教えてくれるものです。

「神は いかなる患難の中にいるときでも わたしたちを慰めて下さり
また わたしたち自身も神に慰めてい
ただく その慰めをもって あらゆる
患難にある人々を慰めることができる
ようにして下さるのである。」

(コリント第二一章4節)

人がその人生の途上に於てさまざまの患難に出会うのは人の世の常だと言えます。

否「艱難汝を玉にす」とある通り、患難は人をして人間的にみがき上げ、成長させてくれるものであると言えます。故に「可愛い子には旅をさせよ」とことわざは申しております。

患難に出会う人のみが、患難に克ことの出来る自分をつくりあげ、また耐える力を養い慰めの何たるかを知るに至るのです。

表記のパウロの言葉は、パウロ自身、患難の中で慰めを発見出来たことを最大の喜びとしております。

彼は患難の中でこそ、ますます神に近づき、神の恵みの尊大さを悟らしめられたのです。実に患難は、自己をみつめさせ、他人に自然に神に心を思いを向はしめるものです。

故に人はときとして患難の中でこそ自己の最高の作品をうみ出し、人生に於ける真実を知り喜びと慰めとを発見するのです。

わたしたちが、他人に対して何がしかの愛ある交わりをまことになそうとするならば、人生の患難に出会い、その中からまことの慰めと希望とを見出し、その慰めと希望とをもって隣人にかかわりたいものです。そのときこそ、わたしたちは隣人に本当の慰めを与えられるし、また隣人とのかかわりで決して失望落たんしたりすることなどはありえないと思えます。

実に、患難こそ、わたしたちをして、まことなるもの、即ち神に導いてくれる養育係であると申せます。

「あなたがわたしを選んだのではない

い わたしがあなたを選んだのである」

(ヨハネ福音書15章16節)

この言葉は、イエスが弟子のもとを去るに際して、弟子たちに語り残されたものです。考えてみると、これほど慰めに充ちた言葉は他にありません。「わたしが……わたしは……」という生き方は不安定で余有がありません。なぜなら、たのみとする「わたし」は実際は実にたよりなき身なのです。そのわたしにわたしの人生の基をおくことは不安定そのものです。

わたしの人生は、わたしの意志で、わたしの慾で、わたしの考えで左右されない。わたしたちは「わたし」を最善に生かそうとされるところの「わたし」の人生のまことの創造の親たる神に基を置くべきであり、その基への開眼こそ「わたし」にまことの平安を与えるのであります。

「お前の人生はお前のものであって、実は、わたしのものなのだ」とイエスは神の声として語り給うのです。そのとき弟子は、「わたし」にたよる不安から開放されて、神にゆだねる平安の道を歩み出したのです。

さらに表記の言葉は、人・に・生・き・が・い・を・明・確・に・与・え・ま・す。

生きがいは決して自分勝手につくり出すものであってはなりません。

人には、すでにひとしく生きがいは与えられているのです。人はすべて神の善をあらわすために、この地上に産み出されたのです。隣人と仲よくし、よきものを作り努力して協力して働く、そこに、生きがいの果を得るのです。

しかし、この人生の意味と目標と生きがいを我慾のため曲げ、私的にとごこめてしまうものは、人としてのまことの生きがいある人生を生きたことにはなりません。

「わたしが選んだ、そして立てた」(15・16)というお方に、はっきり眼を向けよう。

「互^{たが}いの徳を高めることを 追い求めようではないか。」

(ロマ書14章19節)

この場合の「徳」とは、建物などを建立する、という意味から変じて、人の品性・人格などを向上せしめ高める。また信仰を強めるなどという意味も持つようになりました。

ロマ書を書いたパウロは、キリスト者というものは互いの品性や人格・信仰を高め向上せしめるような言動をなすべきで、決して相手の足を引っぱるような心ない言動はつしむべきであると常に語っています。

「すべては徳を高めるためにすべきである」 (コリント 第一14・26)

「人の徳を高めるのに役立つような言葉を語るべきである」 (エペソ 4・29)

「慰め合い、相互の徳を高めなさい」 (第一テサロニケ5・11)

またパウロは次のようにも申しています。

「知識は人を誇らせ 愛は人の徳を高める」 (第一コリント 8・1)

教会というものは知識によって在るものではなく、愛によって在るものです。即ち、ここでは相互に慰め合い、相互の徳を高めるといふ愛が働いていなければなりません。われだけではなくあなたと共にという思いがキリストの心です。神の想いであります。

けだし、この想い、心は神の心キリストの心であると共に、すべての人々が願う心でもあります。教会は、このような心の交わりのうえに成るのであって、決して利益を迫める集団でも、特定の主義主張をもつ同志たちの団体でもありません。

人間なればだれもがするように願ひ、求める自然な交り、これが教会です。

教会はすべての人々の交わりであります。ですから、すべての人々の生の場にあります。

(51・8・29)

「神はあなたがたをかえりみていて
下さるのであるから 自分の思いわず
らいを いっさい神にゆだねるとよい」

(ペテロ第一5章7節)

人は生きてゆくうえでいろいろなことで思いわずらいます。人生とは思いわずらいそのものであり、人が思いわずらわなくなった時は、その人に死が来たときであるかもしれませぬ。

人は思いわずらいをすてきることはできません。しかし、思いわずらいをゆだねることは出来ず。

思いわずらいをゆだねるということは、ほかでもなく自分の人生をゆだねるということです。

自分の人生というものの根本は、自分の考えではどうすることもできない。いわば、自

分以外の何かに支配され支えられてゐるのです。

この人生の重要な事実に気づかないうちは、自分の力で、自分の考えで何とか自分をしなくてはと力むものです。こうしているときには未だ厳密な意味で思いわずらいは生じては参りません。そこにはごうまんがあるのみです。

しかし思いわずらいは、ごうまんな考え思いが不安に陥つたときに生じます。そして、この不安は必ず誰にも来るものです。

不安を覚え思いわずらいを抱くことは悪いことでも愚かなことでもありません。問題はその不安・思いわずらいを根本的にどのように処理し対処するかということです。

「思いわずらいをいっさい神にゆだねなさい」とペテロは申します。ペテロは、自分の人生の根本がどこにあるのかを知っているのです。しかも自分の人生を、かえりみていて下さっているおかたを知っています。

これが信仰の目です。思いわずらいに最も根本的で確実な対処の方法であります。

「患難は忍耐を生み出し 忍耐は鍊
違を生み出し 鍊違は希望を生み出す

そして 希望は失望に終ることはない」

(ロマ書5章3節〜5節)

先日中国の指導者毛沢東が亡くなりましたが、彼の語録の一つに

「困難な条件のほうが順調な条件にまさる。……努力によって、しだいに困難を克服し、順調な新局面をきりひらき、困難な局面を順調な局面にとってかえることができる」とあり、更に別なところで「仕事とは何か、仕事とは闘争であり、闘争とは困難を解決するための仕事である」というような意味のことを語っています。

毛沢東の思想の根底の一つには、人はものごとを正しく見て、そこから道理と意見をひき出し、計画、方針、政策、戦術を提出してこそ、はじめてうまくやれるのであって、これが行動するということであって、これこそ人間に特別に備わった能動性である。そしてこ

れを彼は、「自覚的能動性」と名づけました。

ともあれ、彼は神とか仏とか言うものは信じていなかったでしょうが、人生や世界についての一種の悟りを得ていたように思われます。それはきわめて宗教的深さに於ける悟りであったように思うのです。

毛沢東のことはともかくとして、人はすべからず患難に会うことをさけていては忍耐も鍊達も希望も生じては来ないでしょう。ただし大切なことは、空しく患難に出会って苦しむことは馬鹿気たことであります。私たちは毛氏の言う「自覚的能動性」に於ける患難との闘いをして行かねばなりませんし、更に進んで、その患難の根底に、神の自分への深い配慮を見ている者でなければならぬでしょう。こういうものこそ人間としての本当の「自覚的能動性」であるのだと言えるのではないのでしょうか。ヘルプ人への手紙に第1節から11節までの言動はこれを行っているのです。

「人はみな草のごとく、その栄華は
 みな草の花に似ている、草は枯れ、花
 は散る、しかし、主の言葉は、とこし
 えに残る」

(ペテロの手紙 1章24節)

宗教が人に与えるものは安心立命であります。否、人に安心立命を与え得るものは宗教のみであります。

この世のもろもろのことがらは、時と共に衰えすぎ去り行きます。

「夏くさや つわものどもが夢のあと」

己れが生命をかけ、相互に鑄(しのぎ)をけづり合った人々のすべての熱き情念も、今や夢のあとと化して、何ごともなかったかのように、そこは夏くさが一面生いしげっている。

まことに、しのぎをけづり合って戦い生きること、人生のまぎれもない現実であります。

が、反面、夏くさのおおう夢のあとも、人生の現実なのであります。

私たちはとかく前者の現実ばかり見て思わぬ、いろいろ策をねり、小賢く立ちまわろうとします。しかし、私たちは人生の今一つの現実としての後者を忘れてはなりません。否本当は、後者の現実をふまえて前者の現実に生きることが大切というものです。

そして後者の現実を正しくわきまえさしてくれるものが宗教であり、信仰であります。

表記の聖書の言葉にも二つの現実が語られてあります。しかも、そこでは、二つの現実を見ごとにより越えた者の安心の念、感謝の心が最後の言葉にあらわれております。

「しかし、主の言葉はとこしえに残る」これはいつも、いつまでも変ることなき恵の現実があることを知っている。それに己れの人生を託している、まかせている。そこに己れを置いて、二つの現実を生きようとしているのです。第三の恵の現実こそ、宗教信仰が与えてくれる安心立命の世界であります。

「見よ 今は恵みの時 見よ 今は救
いの日である」

(コリント第二6章2節)

「もどって来ないものが三つある。口から出た言葉。放った矢。失った機会」これはユ
ダヤのことわざの一つであります。

また、アメリカのことわざに「チャンスにはしつばがない」というのがあるそうです。

「すべてのわざには時がある」といったのは旧約聖書伝道の書(三章一節)の著者で
あります。

しかし、私たちはその時を見わけるに、眼力をもたぬ故に、ついぞ失ってしまい残念な
思いをする時があるものです。

「それ功は成り難くして而して敗れ易し、時は得がたくして失い易し、時なるかな、時

は、再び来らず」とは史記にある言葉です。

思慮深く、賢明な者とは、自分の時を見わけることが出来る智慧をもっている者のこと
であります。

“人は自分の愚かさによって道につまずき、かえって心のうちに神をうらむ”（箴言19
・3）

本当にその通りです。目先の欲にまどわされて、切角の時を失ってしまふ。また「この
次にしよう」「そのうちに」「じゃまくさい」「いそがしい」さまざまな思いの故に時を
失う愚かを行い、あげくのはてには「己れはついでない」と人をうらみ、運命とし、神を
うらむ。

時に生きる秘訣は「素直」であるということではないでしょうか、愚かな知恵を小賢し
くふりまわさず、素直な心で見つめること、特にイエスの語られるところに素直に耳を傾
けるならば、実は一日一日、否一時一時が「恵の時」「救いの日」であることがわかるよ
うになるものです。

聖書の知恵、キリストの恵みは、自分のすぐす一時一時のうちに恵みと救いを見ださせてくれることです。この生がほかならぬ「一期一会」でもあるのです。

43

「福音のために わたしはどんなことでもする。わたしも共に福音にあずかるためである」

(コリント第一の手紙9章23節)

福音とは「うれしい知らせ」ということです。では何をもって「うれしい知らせ」と言うのかと申しますと、聖書はイエスの生涯そのものが「うれしい知らせ」だと教えておられます。

なぜイエスの生涯が「うれしい知らせ」なのでしょいか、それはイエスが人間としての眞実まことの道を生きたからです。

わたしたち人間には共通の願いというものがありません。それは、人間として素直に自然に生きたいという願いです。ところが、毎日のわたしたちのは素直さを欠いた、さまざまに汚い思いで生活しています。たてまえという自然さより、本音という不自然さをあたりまえとして生きています。でもその生き方が良いと思つて生きている人は誰もいません。しかたがないのだ、と思つて生きているのです。これより生きる生き方はないのだと、いわば心の深いところであきらめているのであります。

ところが、そのようなわたしたちの生きざまの眞只中へ、人間として素直で自然な眞実の生きざまを生きたお方が現れた。それは暗黒の中の光明の出現のようであり、地獄の中で仏に逢つたようであり、美を求めてやまない芸術家が最高の美を、ついに発見したようなものです（マタイ13・45・46）それは、このうえなきよろこびであり、慰めであり、救いであります。

イエスの生きざまを見る時、そこに本来的な人間の姿を見ることができるとは、自分のあるべき姿、自分のもとと求めて止まぬ自分の姿がそこにある。つまり、自分が本来おるべき故郷をイエスの生きざまの中に見るのです。これが「うれしい知らせ」の内容であります。

44

「律法の行いによっては、だれひとり義とされることがない」

(ガラテヤ2)

キリスト教の説く倫理や道徳は高くて美しい。曰く「右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けよ」
「汝の敵を愛せよ」……。

だから多くの人はクリスマスチャンになることは大変なことだと思う。

しかし、こういうキリスト教理解は全く当を得ていないし、誤解もはなはだしいと言える。

「わたしの求むるのは献げものではない。あなたのくだけた魂である」(詩51・17)言
うなれば、手みやげなどいらない、わたしの求めることは、あなたの真の心である”とい
うことです。

「献げもの」「手みやげ」とは、物であったり、表面的な善行のことです。

神は人間の善行を求めはするが、人間にとって善行を完全にすること、いかに
むつかしいことであるかを知っていられる。人間は善行で神の前で百点をとって、救いの
条件とすることは出来ません。つまり、表記の通り「律法の行いによっては、だれひとり
義とされることがない」のです。

神の求めるものは、くだけた魂、つまり、真の心です。

真の心とは、自分の悪を正直に素直に認め悲しむ心、ゆるしを願う心です。

これなれば誰れでも出来ます。この眞の心を神は人に求め、それを救いの条件にしよう、
というのですから本当にありがたいことだと思えます。

『万能たりて一心足らず』ということわざがあります。つまりあらゆることに通じてい
るがただ一つ眞実に欠けている』ということを書いたものです。

わたしたちだって、何もかもよく出来ていばつている人よりも、少々失敗のする欠点の
ある人でも、けんきよで眞心のある人の方を好感をもって見ます。神も同じ心でありまし
よう。

(51・10・10)

45

「あなたがたは、終りの時に啓示さ
るべき救いにあずかるために、信仰に

より神の御力に守られているのである」

(ペテロ第一の手紙1章5節)

これは何と慰めに満ちた御言葉でしょう。

この言葉は私たちの現在と未来・生死を越えた永遠にかかわる慰めの教えであります。

「信仰により神の御力に守られている」これは今日現在守られていると言うのです。

「信仰により」とは、神の眞実を知っていることにより、ということなのです。

キリスト者とは、神の眞実を知っている者ということなのです。自分の眞実を知り信じているというではありません。自分の眞実・人間の眞実それ自体はすばらしいものではありませんが、その眞実は時としてうつろいやすく変化するものです。それは頼りになるようであるが、その実頼りにはならない悲しさをもっています。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さった」のであります。十字架とはその事実を告げるものです。わたしたちはこの神の大きい愛に守られて

いるのです。これが神の真実であり「信仰により」という故んなのであります。ですからこの神の愛、神の真実にいだかれて生活している者には「恐れがない」のです。

さらに、この愛は「終りの時に啓示される」のです。「啓示される」とは「はっきりする」「明確になる」ということであります。

また「終りの時」とは、私の終りの時ということです。私にとってこの世が終る時、という意味、即ち死の時であります。

神の御守りは、私が生きても死んでも少しも変らない、というのです。何とうれいことでしょうか。キリスト者とはこんな大きなお恵みの中にいながら今日という日々を生かされているのであります。

何とありがたいことでしょうか。

「開け。主なるわたしたちの神は
ただひとりの主である。心をつくし
力をつくし 精神をつくして 思いを
つくし 主なるあなたの神を愛せよ」

(マルコ福音書12章29節30節)

これは、旧約聖書申命記6章4節よりの引用であります。

一般に聖書は一神教を説くといわれますが、一神教とか多神教とかいうことは考える必要はないと私は思っています。そんなことより、聖書は、ものごとやことごらの根本について語っているのであって、謂わば右の聖書の言葉は、この世の本の元は神そのものであって、この世のすべてはその神の表現であるのだ、と言うことを言っているのです。人間は勿論のこと自然のすべてが、神そのものを表し、恵みの表れが、その一つ一つであることを語っているのです。従ってその本の元なる神を知るとき、生・き・と・し・生・け・る・も・の、大自

然の太陽はじめ樹々の一本一本、山川草木すべてが、神の表れであり、存在することそれ自体がお恵みであることが理解できます。

ですから決して、人間は自然のすべてを、あたかも自分のためにあるかのように思い込んで自由にできると考えることは、とんでもない間違いであります。

このことが理解できるようになりますと、自然の一つ一つを感謝して見、又受けとりこそすれ決して、それらの一つをあたかも神様の如く思い込んで拝むようなことはしなくなります。このことが「偶像礼拝をしない」ということの意味なのです。

わたしたちは、いつもものやことがらを見るとき、それらの本の元をしっかりと見るところを忘れてはなりません。これをしっかりと覚えておきなさいということを行っているのが申命記 6・7と8の言葉です。

それ故に聖書の一神教ということを誤解しないようにしたいと思いますし、又「偶像礼拝をしない」ということについても誤って語らないようにしたいものです。

「もし、罪がないと言うなら、その人は自分を欺くことであって、真実はその人のうちにはない。

もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」

(ヨハネ第一の手紙1章8節・9節)

わたしたちは日ごと、さまざまな人やこととがらに出会って、さまざまなことを考え感じて日を過しています。うれしい時もあり、腹立たしく感じる時もあり、笑う時あり、泣く時もあり、誇らしく思う時もあり、ねたましく思う時もあります。時には、あんな人死んでしまえばよい”などと思うことだってあります。

考えてみると、人間の罪とは、このようにさまざまな思いを負って生きている日々の生

きざまそのものをひっくるめて言った言葉だと思ふのです。

ただ、その場合「人間とはしょせんはこんなものなのさ」と軽く思い過してしまふか、「あゝ人間とは悲しいものだなあ」と感ずるかの差によって、その人の罪の意識は左右されます。

聖書は前者の部類の人々を「罪がないと言う人」に属する者だと言ひ、後者の人を「真実のある人」に属する人だと言つてゐるように思ひます。

後者の人は、人間の生そのものを深く見てゐる人だし、前者の人は人間の生を深くで見てよとしない人だと思ひます。

「よくよ考へたつてしかたがないではないか」とその人は言ひます。しかし聖書は、かういうあきらめ、居直りに對して「あきらめ、居直りは早すぎますよ。眞実があります。ゆるしと救ひはあります。人間の汚れた心の外、イエスを見なさい」と告げます。みにくい世の中の人や出来ごとばかり見てゐないで、イエスに於て示された神の眞実を見なさい。と告げます。その時人は、自分の罪をよりハッキリと見ると共に、罪からの救ひとして

の希望・真実・慰めなどを見出すことができるようになると思います。

(51・10・31)

48

「わたしは あなたがたを捨てて孤
児とはしない。」「わたしのおるとこ
ろに あなたがたもおらせるためであ
る」

(ヨハネ福音書14章3節・18節)

林さんのおじいさんは一度死んだけれど、あとで息を吹き返された。その時おじいさんは「わしゃあ死によったことある。ずーっと広い野原をひとり歩いて行きよった。そりゃー淋しかったど」と周囲の人に言ったそうです。